

親の会は、「社会の重要な資源」

新聞書評が目に止まり、「わかちあい、育てあう親の会－病気や障害のある子と家族のために－」を購読した。

著者は、我が子が脳の難病に罹り、Drの勧めで親の会を作り、子どもが13才で亡くなった後も、「難病のこども支援全国ネットワーク（そのHPは、下欄「難病支援ネットワーク」からリンク）」を設立し活動を続けており、2003年朝日社会福祉賞を受賞された方である。

長年のいろんな親の会に係わり合っている経験から、「親の会が活発に活動することができれば、病気や障害のある子どもと家族を支えるための、より成熟した社会が築かれるのではないか」との思いから、「親の会の役割、性格、運営などについて纏める」ことに視点をおいた、いわゆる親物書籍とはちょっと主旨の異なる書である。

後半は、このネットワークに参加している親の会からの「会の発足、会の活動、問題点」等の紹介の9編の寄稿も掲載されている。その中には、宮城県内の方には馴染みの「ぴあすまいる－経管栄養の子どもと親の会－」の寄稿もあった。

更に、Drからの「専門職からみた親の会」と題する寄稿も掲載され、また、参加の親の会の連絡先一覧等も掲載されている。

私自身も既に40年近く障害児の親、親の会と係わってきただけに、「行政の担当者や学校管理者等を喧嘩相手にするのではなく、自分たちの理解者として仲間に加える親としての工夫と努力を！そうした心情なくして、不特定多数の一般社会に『障害や難病のある我が子たちに理解を！』と叫ぶはいかがなものか！」と常に語り続けてきただけに、同義の記載も目にし、共感、共鳴しつつ読んだ。

また、著者は親の会の会員同士の機能は「であい、わかちあい、ひとりだち、ときはなち」でないかという。実に言い当てている。

更に、著者は、なによりも親の会は「社会の重要な資源」であり、「社会はもっと親の会を育てる必要があるし、親の会自体ももっと切磋琢磨してこれまで以上に自らの社会性を育てなくてはならない」という。

親自身を含め、社会の一人一人の意識改革が必要ということだろうと思う。

(2005年10月12日 記)